

## 『岡本太郎の眼』

弘前市立相馬中学校

石岡南樹

私は『岡本太郎の眼』という本を選びました。その理由は、私が美術関係の将来を一年生の頃目指していたときに、校長先生がご退職されるとのことで似顔絵を描かせていただき、そのお礼でいただいて非常に感銘を受けたからです。岡本太郎さんは、その校長先生の恩師の恩師とのことで私も受けついでいきたいと感じました。この本は、岡本太郎さんの文学作品がたくさんまとめられていて、彼の生き方や価値観などを感じさせられ、考えさせられ、考え直させられるそんな作品です。

この本について、特に印象に残った場面が三つあります。一つ目は、「本職は生きること」です。これは読んだときに岡本太郎さんの不思議さをいきなり感じました。ある人に、「あなたは絵描きでありながら、さかんに文章も書くし、いったいどっちが本職ですか」と問われ、「本職などありません。どうしても本職というのなら人間ですかね」と話する場面です。この場面は、誰かにほこれる職をたくさん持つて

いるはずなのに、と疑問に思っていました。私は将来「芸術家です」と胸を張って言えるようになりたいと考えていましたが、この話を読み、考えが変わった気がするのです。それは、岡本太郎さんのように生きがいを持つて猛烈に生きること。夢にたどりつくことがゴールではなく、そこにいたるまでも、その後も内に秘めるものをつき出していき、そのときこそ一番生きていく、すなわちゴールなのだと思います。ときどき自分を見失うときがあります。そんなときこそ色々な問題に全力で体当たりしていく、それが人生なのだとときと教えてくれたのだと思っています。

二つ目は、「子供が描いているのは「絵」ではない」です。話は子どもに対する疑問から始まります。仲間が外で面白そうに遊んでいるのに、一人でわき目もふらずに絵を描いたりする。おいしいお菓子がそばにあってもふり向きさえせず描き続けている。そこに情熱を感じる、そんな話です。ここを選択したのは、いつから自分の好きな絵を描かなくな

ってしまったのかと自分自身で感じたからです。私が小学生の頃、友達に頼まれて絵を描いたり、好きな絵を模写したりと何かにとらわれていたと思います。保育園児の頃は、紙に丸かも三角かも分らない線を力いっぱい描きまくっていた。それを鑑賞したりもしないし、評価したりもしなかった。それは、そのときの感情を爆発させ、紙にそれを乗せていたからだろうと感じます。私はまだまだ幼いと思っていたが、心はもう大人直前あたりまで来ていると思えます。それを子供にかえるには、それほど精神力が必要です。が、人間内には子どもの頃のような純粋さがある。それを放出させて、何ごとにもぶつかっていけるようになっていきたいです。

三つ目は、「老熟」と「青春」です。これは、日本の運命がになつている青春の意味を考えていく話です。「子供が描いているのは「絵」ではない」、では、子どものように純粋な心でたくさんさんの問題に突っ込んでいくことが大切だと言っ

た。そのように大人のような感情で成長した人には、青春は美しい思い出であり、心の傷の一つであるかもしれない。しかし、それとは違う青春があると言うのです。激しく現実にはぶつかっている人間の心の奥には、いつでも若い情熱が瞬間瞬間にわき上がっている。人間の内にあって、精神の若さと肉体の若さは猛烈に交流し、侵入しあっている。そういった流動的な状況が青春なのだと感じます。子どものような純粋な心というのは、自分の胸を走り続ける青春なのかもしれないと思えます。私は青春のまっただなかにいます。年齢に固着して考えずに、強力な精神力で現在に生きていきたいと思

います。  
この本を通して、私は岡本太郎さんのような人間性などを考えながら生きていくことの重要性を学びました。今後、夢に向かって進んで行くと思えますが、純粋な心で突っ込みた